

私のおすすめの本

脇本 利紀 教授
(租税法)

(1) 伊藤恭彦著『タックス・ジャスティス—税の政治哲学』 風行社、2017年

米国の政治家・外交官で、著述家、科学者などとしても多彩な才能を発揮した Benjamin Franklin(1706-90)は、

In this world nothing can be said to be certain, except death and taxes.

(この世で確実と言えるのは、死と税金だけである。)

という言葉を残しています。確かに税は私たちにとって不可避の存在であり、同時に私たちの社会や暮らしを支えていく重要な財源となるものです。しかし税の重要な役割を十分理解していても、いざ納税となると誰しも「痛税感」を伴いますし、税は安いほうが良いが、医療費の自己負担は低いほうが良いといった矛盾した意見を持つこともあるでしょう。

本書は、社会契約の原理に立ち返り、どのような社会を形成していくべきか、つまり、社会の「共同目的」を達成していくためには、どのような税制を選択すべきなのか、ということをも真正面から論述しています。また、本書は「正義論」で有名なロールズの政治哲学に言及していますが、私のような政治哲学には門外であっても理解できるよう平易な文体で説き起こしています。税は苦役なのか、なぜ税は必要なのか、なぜ累進課税制度が 필요한のかなどについて、租税法や税を深く考え得る糧となる良書です。財務省の資料によると令和2年度末普通国債残高は約964兆円(見込み)であり、これは、一般会計税収の約15年分に相当するとのこと。このような状況の下でタックス・ペイヤーとなっていく学生の皆さんにはぜひ読んでほしいと思います。

(2) B.オーバーマイヤー、F.オーバーマイヤー著(姫田多佳子訳)『パナマ文書』 KADOKAWA 2016年

オフショア金融センターでの会社設立や運営代行等を手掛けるパナマを拠点とする法律事務所から流出したとされる「パナマ文書」を「国際調査報道 ジャーナリスト連合(I C I J)」が入手し、世界各国のジャーナリストと連携して緻密な取材を展開し、公

表に至った経緯を当事者たちが綴ったものです。公表された情報は、1970年代から2015年末までの40年間の文書からなるもので、出資した個人・法人の名称や、設立法人の所在地、設立年月日などで、この「パナマ文書」の流出により、国際的な租税回避や脱税、マネーロンダリングなどの問題が浮き彫りとなりました。オフショアとはいわゆるタックスヘイブン国・地域のことですが、世界の富裕層たちがタックスヘイブンなどで何をしているのか、その一端を知ることができますし、国際間の協調によりこの問題に対処していく必要性や重要性を強く実感すると思います。上記(1)同様に、タックス・ペイヤーとなっていく学生の皆さんにはぜひ知っていただきたい内容であると思います。

(3) 司馬遼太郎著『坂の上の雲』 文春文庫

国民的な作家の代表作で、映像化もされ、いまさら紹介するのはどうかとも思いましたが、私自身、大きな影響を受けた1冊ですのであえて取り上げました。はじめて読了したのは高校生の頃で、その後、何回か読み返しました。最初は主人公たちの英雄伝として読んでいましたが、やがて私自身が組織の一員としての経験を積むにつれて、組織と人間という観点からこの本を読んでいったように思います。おそらく組織の中で与えられた役割を自覚し、それ責務を全うする姿に感銘を受けたのかもしれませんが（私は門外ですが、政治哲学でいうところの「コミュニタリアニズム」でしょうか）。総司令官の大山巖は作戦を統括する児玉源太郎がその能力を最大限に発揮できるような環境を作るとともに、劣勢の時にも微動なりすることなく組織を維持していきます。秋山真之は参謀として最も効率的で効果的な作戦の立案に当たりますし、兄の秋山好古は前線指揮官として逃げることなく、また、誰に責任転嫁することもなく苦難に立ち向かいます。何回読んでも、私にはいささか欠けている主人公たちの実践的知恵に気付かされる思いです。ちなみに私は「竜馬がゆく」からは利が理に勝ることがある、「播磨灘物語」からは組織における男の嫉妬、「箱根の坂」からは人生50代から、「花神」からは超合理性が時代を変え得る、「戦車 この憂鬱な乗り物」からは合理的精神の重要性、といったことも学んだように思います。